

説教 『恵みを暗闇から明るみに』山本 護 牧師
聖書 申命記4:9~10/マタイ福音書10:26~31

「目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい(申命4:9)」。遠い昔の最弱小部族(7:7)への戒めを、今私たちが一人の孫として日本語で聞き、受け取っている。なんだか奇妙な気がする。では、受け取った私たちは何を語り伝えていくのか。「わたし(神)の言葉を彼ら(民)に聞かせ、彼らが地上に生きる限り、わたしを畏れることを学び、またそれを子らに教えることができるようにしよう(4:10)」。生涯、恐れを学び続け、それを後世に手渡していくこと。連綿と続いて私たちに貫く戒め。これをイエスの言葉と重ね合わせ、いっそう鮮やかに捉えてみたい。

「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである(マタイ10:26)」。先週の説教で「サタンは人間の隠された所へ入り込む」と述べた。サタンそれ自体か、人間のサタンのなところなのか、サタンは隠れた領域でよく働く。しかし「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている(10:30)」。すなわち、覆われているものは現わされ、隠されているものは知られるのだから(10:26)、サタンは存分に働くことができない。

「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい(10:28)」。恐れるのは、サタンでも、人間でも、未来でもない、命の源である神のみを恐れる。とはいっても「恐れるな(10:26,28,31)」と三度もくり返されるほどに、私たちは神ならざる世の諸々を恐れてしまう。そのためにイエスは、「髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな(10:30~31)」と、神の御守りを保障された。

それでは、人間の隠れた領域など無い方がいいのか。「そうではない」とイエスは言うと思う。たとえサタンが忍び込みやすい所であっても、いやサタンが働く場であるがゆえに、私たちの隠された領域には何か意味があるのではないか。そこに、動物とは違う人間の差異と多様な現実があるのでは。

「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい(10:27)」。なんと、恵みの言葉を受け取るのは「暗闇」で。だがこっそり受け取り、こっそり使うのではない。存分に戴いている恵みを、己が生き方として「明るみ」に出す。そのように各々が応えてこそ、恵みは、人間の恵みとなりうる。恵みや救いはサタンとすれ違う所で受け取る。そのような場へ踏み入るからこそ、神以外の何ものをも恐れてはならないし、恐れる必要はない。

「彼ら(民=私たち)が地上に生きる限り(申命4:10)」を直訳的に言うなら、「すべての日々で」。すべての日々、私たちは「主を畏れることを学び(4:10)」続ける。不安の時、憤りの時、悲しみの時、虚しい時はもちろんのこと、平安や順境の時も、主を畏れて生きる。「畏れる=恐れる」というと、何やら硬くなって息苦しくなる感じがするが、それは違う。むしろ世の諸々の恐れが縮小するがゆえに、かえって柔らかく、実感として清々しくなるのではないか。あたかもイエスの人間性のように。

安価で売られている雀の命運もまた、私たちの父なる神の主権(マタイ10:29)。それゆえ、小さな命への圧迫に抗うことになる。教会の社会的な活動もまた、暗闇で示された恵みの現れなのである(10:27)。

《おまけのひとこと》

逃れ場はない 明るみでは人間の競争が激しく 暗闇ではサタンが跳梁する 引き籠つてもなお
せき立てられている 解き放たれる順序は暗闇から 恐れずに耳を澄まし その声を聞くところから